

# 日本中国学会会報

NIPPON CHŪGOKU GAKKAI

1993年(平成5年)

10月20日

第2号

〒113 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館 電話 03-3251-4606

FAX 03-3251-4853

## 詞ヲ致スコト凡ソ七次…………

— 第四十五回大会閉幕後にこれを回顧して —

理事長 伊藤淑平

恒例の学術大会が、この秋は例年より早く9月25・26の両日、大阪府吹田市立文化会館に於て開催された。これに合わせて、研究雑誌『日本中国学会報』第四十五集及び年刊の会員名簿も刊行を見た。会則第三条に定める当学会の「事業」としては、これらのほかに近年は4月・10月に会報を発刊しており、本誌が即ち第二号であるから、主要な事業はほぼ順調に実施し得たことになる。先ずは御同慶の至りである。

それにつけて、理事・評議員の役員各位の御協力は申すに及ばず、大会開催校大阪大学(加地伸行代表)、学会報編集担当校東京大学(池田知久代表)及び「学界展望」執筆担当校一哲学部門大阪市立大学(三浦國雄代表)・文学部門京都大学(興膳宏代表)・語学部門お茶の水女子大学(佐藤保代表)の三校、併せて五大学の関係各位の御尽力を思わずにはいられない。また印刷を担当された安道印刷、手前味噌めくが事務局の両幹事の御努力も与って力がある。ここに併せて心から厚く御礼を申し上げる次第である。

実はこれは大会第一日夜、梅田の粋な仏蘭西料理店ルシェルで催された大懇親会のスピーチ冒頭でもつい触れてしまったことであるが、先立って24日に開催された本年度第二回目の理事会での御挨拶に始まり、開会式・評議員会・学術専門委員会・総会・閉会式まで、それに懇親会も数に入れると、わたしは都合七つの席で理事長として御挨拶をした勘定となる。「致詞凡七次」を標題とした所以である。理事長受難の季節のようであるが、拙いのを頓着せぬことにすれば苦にもならぬし、そういう晴れがましいのが役柄であることも心得ている。要は学会の運営がさまざまなレベルで、実に多数の方々の分担協力を得て成り立っていることが言いたかったのである。

話をここでさらに学術大会に絞るならば、どの大会の場合も大会準備会が組織され、関係者は等しく熱意を以て運営進行に当たってこられた。今回も無論例外でなく、数年前の準備着手の段階から大変な熱意を燃やして取組んでこられたと聞く。その結果、大阪大会はとり分け多くの新機軸を打出された特色に富むものとなった。

例えばシンポジウムである。

従来大会ではかつては継続的に、近年は断続的に開かれているが、五年前の大正大学に於ける大会で「中国学の未来像」をテーマとするものが催されて以来のことである。「儒教と二十一世紀と」と題する今回の企画のために、会員外の島田虔次・陳舜臣・佐藤慎一の三氏が貴重な時間を割いてゲストとして出席され賑わして下さった御厚意を多としたい。島田・陳二氏は基調報告を、佐藤氏と井波律子会員はパネラーを勤められた。河田悌一会員の司会の妙が発揮され、このテーマについて参加者は改めて考えてみようという刺戟を与えられたことと思う。

また例えば講演である。

講演者の田仲一成会員が、本年6月、久しきに亘る中国祭祀演劇の研究業績によって学士院賞恩賜賞を受賞されたことは、既に多くの人の知るところであろう。昭和47年、松下忠会員が受けられて以来、20年振りの慶事である。その田仲氏が目下研究を進めておられる目連戯に関して講演をされ、聴衆に多大の刺戟と深い感銘を与えられた。わが学会の為にも気を吐いて下さった同氏の講演は、洵に時宜を得たものであったと言えよう。

学術ビデオの放映をも含めて、プログラム中でも注目を惹くこれらの番組のことはこれ位にして、学術大会の眼目たる会員の研究発表も、哲学・文学語学両分科会とも概して頗る充実していたように思う。司会の労を執ってこれを盛り上げて下さった方々に対してここに感謝の意を表する次第である。ただ院生会員の研究発表については、申し込みは例年並にあったようであるが、最終的に発表の場を得た方々がかなり限られたのは遺憾であった。また近現代文学や語学の分野の発表を殖やしプログラムの充実を図ることも今後の大会の一課題であろう。

今年は、例年初日午後の総会が第二日の午後に移され、そのあとさらにビデオ放映が設定されていたせいもあってか、総会出席者が近來になく多数に上ったことは有難かった。

その席上で、前年度決算書の承認、ついで通常の事業計画とこれに基く予算案が審議決定を見たほかに、「創立五十周年記念行事及び事業について」を特に提案させて頂いた。昭和24年(1949年)10月に設立されたわが学会が今世紀末に一つの節目を迎えるのに備えてのことである。本号彙報に別記のような手順で準備に着手することが承認されたので、については会員各位から御意見・御希望を事務局宛に奮ってお寄せくださるようお願いしたい。

かくして開催校を始め関係各位の御尽力によって本大会は周到に作られた全プログラムを順調に終えることが出来た。受付出口に堵列された準備会の方々に最後の御挨拶をした際、加地伸行代表がにっこりして「550名を達成できました」と語られた。その目標数はかねて私共も伺っていたところで、首都圏で開催された場合でもこれを越えることはなかったかと思う。「結構でした」とお返事はした。それはその通りなのだが、本年全会員数は1840名にも達していることからすると、参加会員の数はなお少なきに過ぎよう。明年度はお茶の水女子大学が開催校を引受けてくださり、総会での御挨拶に立たれた佐藤保代表は、「来年多数皆様の御出席をお待ちいたします」と頼もしくも力強く述べられた。本年よりもさらに多くの会員が明年10月、茗溪の辺りに参集されて学会の主たる事業の一つ学術大会を盛り上げてくださるよう期待して止まない次第である。

9月26日の総会における決定事項及び諸報告は次の通り。

【議決事項】

- (1) 平成4年度収支決算書が承認されました。
- (2) 平成5年度事業計画並びに収支予算書(案)が承認されました。
- (3) 数年後に迎える学会創立五十周年の記念行事及び事業を企画立案するための小委員会(関東地区選出理事一学術専門委員を兼ねる一5名を以て構成する)の設置が決まりました。同小委員会作成の素案を基に、明年3月の学術専門委員会への諮問、5月・10月の理事会での審議及び評議員会への諮問を経て、次回総会に提案されることとなります。またこれらの実施に備えて、本年度末から繰越金の一部を特別会計(第二部)に繰入れ、別途積立てることも併せて承認されました。
- (4) 日本学術会議第16期会員候補者として、本学会より哲学部門に戸川芳郎会員、語学文学部門に石川忠久会員をそれぞれ推薦することに決定しました。
- (5) 次年度の大会開催校は、お茶の水女子大学に決定しました。平成6年10月8日(土)、9日(日)の予定。

【諸報告及び関連事項】

- (1) 平成5年度の選挙管理委員は、次の各会員に委嘱されました。(＊は重任)
  - (理事) 福井 文雅(委員長)
  - (評議員) 伊藤 虎丸・松浦 友久
  - (一般会員) ＊渋谷誉一郎・馬淵 昌也・＊宮田 末子  
山口 建治・山口 守
- (2) 『学会報』第46集の編集担当校は、新しく早稲田大学(責任者は松浦友久会員)に委嘱されました。第46集の〈学会消息〉欄の原稿を、記入責任者から早稲田大学文学部中国文学研究室(〒162 東京都新宿区戸山1-24-1)宛お送り下さい。資料は平成5年1月から12月までのものとします。

『学会報』第46集の〈学界展望〉執筆校は以下の通りです。

- 哲 学 大阪市立大学文学部中国学研究室 代表：三浦國雄会員  
(〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138)
- 文 学 京都大学文学部中国文学研究室 代表：興膳 宏会員  
(〒606 京都市左京区吉田本町)
- 語 学 大東文化大学外国語学部中国語研究室 代表：平松圭子会員  
(〒175 東京都板橋区高島平1-9-1)

著書及び論文の抜刷などの資料を平成6年1月末日までに上記各研究室宛お送り下さい。掲載資料は平成5年1月から12月までのものとします。

〈学界展望〉につきましては、資料現物の送付とは別に、会員各自同封の用紙(二種類あり)により自己申告していただくことになっております。申告なさる方は、用紙に記入の上、同封の封筒を利用して明年1月末日までにご返送下さい。郵送費は各自ご負担願います。なお、御申告が無い場合は、掲載漏れとなることがありますのでご注意ください。また、研究論文目録として掲載不適当と思われるものは、執筆担当校の判断で割愛されることもあります。

○『学会報』の掲載論文公募について

- 締切日 平成6年1月31日(当日消印有効)
- 枚 数 本文・注・図版等あわせて400字詰原稿用紙55枚以内
- 要 旨 400字詰原稿用紙5枚以内を添付する。

応募者は『日本中国学会報』巻末の〈論文執筆要領〉を参照の上、これを遵守して下さい。(原稿は必ず書留による郵送のこと。事務所への持込みは厳禁。)

- (4) 本年度の日本中国学会賞は、以下の会員が受賞されました。

哲学部門 該当者なし

文学部門 野村 鮎子会員（立命館大学大学院）

総会の席上、理事長より賞状と賞金（8万円）が贈られました。

- (5) 下記の日程で日本学術会議哲学系公開シンポジウム「終末観について」が開催されます。当学会からは坂出祥伸会員が派遣され、講演します。奮ってご参加ください。

日時 平成5年10月26日 午後1時30分～5時

会場 日本学術会議（東京都港区六本木7-22-34）

訃 報

会報1号発行以後、次の5名の会員が逝去されました。

川口 久雄 5. 4（中部） 星川 清孝 7. 11（関東）

小川 環樹 8. 31（近畿） 松井 武男 9. 7（関東）

中村 忠行 9. 24（近畿）

総会の席上、上記の方々と会報1号に掲載の方々に対し、  
黙祷が捧げられました。

◎会費納入について

会費未納の方には振替用紙を同封致しますので、至急ご送金願います（振替：東京6-89927）。なお、数年にわたって未納の方はご注意願います。滞納が4年に及ぶと、会員資格が停止されます。

◎『学会報』送付停止について

会費未納が2年に達した方には『学会報』を送付致しません。会費納入が確認され次第、配布いたします。また、その際には、振込用紙裏面に未送付の『学会報』の号数をご注記ください。

◎新入会の申し込みについて

次回の新入会員の審査は平成6年度第一回理事会（5月開催）に於いて行われます。入会申込書は平成6年4月発行の「会報」第一号に掲載します。

◎住所変更について

住所・所属機関等の変更は速やかにご通知下さい。

下記の住所不明者について、住所・所属等、ご存知の方があれば、お手数ながらご一報願います。

猪又 稔・神應 徳治・窪田 忍・高崎 幸子・橘 純信・玉利 房枝・丹野 亮造

安永 博志・矢野 正敬・矢萩 哲文・山内 雅幸・横内 哲夫・芳谷大介

# 平成5年度文部省科学研究費採択状況一覽

※は、萌芽的研究

○総合研究（A）

中国の方言と地域文化（500万円）

平田昌司（京都大学）

○一般研究（B）

新出土資料による中国古代医学の研究—張家山出土漢簡を中心に—（170万円）

坂出祥伸（関西大学）

中国知識人の精神構造の展開についての史的研究（450万円）

中嶋隆蔵（東北大学）

○一般研究（C）

両漢における「謠」の社会思想史的研究（100万円）

串田久治（愛媛大学）

嵎康の〈論〉における「言語」の研究（80万円）

森 秀樹（立教大学）

魏晋南北朝期の地理書の思想史的研究

—「華陽国志」等の地方志を中心として—（100万円）

薄井俊二（埼玉大学）

近代中国における子ども観—思想家魯迅を中心として—（90万円）

湯山トミ子（愛媛大学）

※雲夢秦簡より見た家族の研究（画像処理によるデータベースの構築）（120万円）

工藤元男（文教大学）

宋代の説話と伝承の研究（70万円）

岡本不二明（岡山大学）

「包公案」研究（90万円）

阿部泰記（山口大学）

日本残存資料による『全唐詩』改訂の試み（100万円）

齋藤 茂（大阪市立大学）

佐賀鍋島諸藩における漢籍と漢学の研究

—藩校・聖堂の盛衰と漢籍の集散を中心として—（80万円）

高山節也（二松学舎大学）

中国臉譜考（90万円）

磯部祐子（高岡短期大学）

○一般研究（C）（継続）

明末清初の経世思想に関する研究（30万円）

佐藤鍊太郎（北海道大学）

仙の意味の再検討と道教における仙の位置付け（30万円）

大形 徹（大阪府立大学）

近世における中国・朝鮮・日本三国の〈西遊記〉演劇の比較研究（50万円）

磯部 彰（富山大学）

○奨励研究（A）

六朝期における「隱喻」論—文学批評と哲学の交錯—（90万円）

中嶋隆博（東京大学）

17世紀中国における思想史像の再検討（90万円）

本間次彦（恵泉女学園大学）

正始石經にみる後漢・三国時代の尚書文献学と古文学の様相

及び建立後の学術への影響（90万円）

木島史雄（京都大学）

後漢時代の豪族と儒教理念（90万円）

渡辺義浩（北海道教育大学）

中国歌辞文学の音譜資料の記譜法及びその和本資料に関する基礎的研究（90万円）

明木茂夫（九州大学）

佚文資料による切韻の研究（90万円）

遠藤光暁（青山学院大学）

明末清初の文人交友研究—黄道周を中心として—（70万円）

河内利治（調布学園女子短期大学）

○国際学術研究〔代表者〕

中国文化における道教の位置と現状についての総合的調査（1100万円）

蜂屋邦夫（東京大学）